

【別紙様式2】

目標に向かって進んで運動に取り組む子供の育成 ～運動の喜びや達成感を味わわせる指導の在り方～

曾於市立財部小学校

全校生徒数	300名(男子 150名 女子 150名)		
全クラス数	13	教職員数	20
運動部活動数		運動部活動参加率	

取組時の課題と目的

1 取組時の課題

本校は、曾於市最北端に位置し、周囲を山林や田畑に囲まれた自然豊かな環境にあるが、校区の広さ故に通学バスや自家用車での送り迎えを利用する児童が多く、徒歩で登下校するという日常的な運動機会が保障されていない児童が多い。徒歩通学をしている児童は約4割である。また、各種調査の結果から、「自己肯定感」の低さが学習活動全体へマイナスの影響を与えていることも明らかになってきた。さらに、これまでの運動能力調査の結果から、全校的に県平均記録に届かない種目が多かったり、記録の伸びが小さかったりする状況があった。日常的に運動をする児童とそうでない児童の二極化も大きな課題である。

2 取組の目的

- (1) 授業改善の取組を中心に、児童の体力向上を図る。
- (2) 運動する喜びや達成感を味わわせ、生涯にわたって運動に親しむ態度を育てる。
- (3) 授業を通して、認め合い、助け合いの場を多く設定し、自己肯定感を高める。

取組の内容

1 授業改善の工夫

(1) 体力向上サイクルの見直し

児童の体力が低い→児童の課題を把握→
学校における体育的活動の充実→運動が楽しい!
もっと運動してみたい! (運動時間の増加) →
体力の向上! (取組の結果としての成果)

(2) 体育授業の「楽しさ」の再認識と喜びの関係把握

- ① 「技能」面での楽しさ
経験する・動く・わかる・できる
- ② 「態度」面での楽しさ
公正・公平、安心・安全、認められる、役割を果たす
- ③ 「思考・判断」面での楽しさ
選ぶ・考える・工夫する・伝える

(3) KYTタイムの導入

K (危険) Y (予知) T (タイム) を設けることで、安全な準備・運動の行い方を指導する。

(4) 「できるポイント」の活用

一定の技能を習得するための動きを「できるポイント」として捉え、学び合い、師範、映像等を活用し、動きを言語化、可視化することで、「わかる」「で

きる」を味わうことができる授業づくりを進める。

(5) 学習過程の見直し

- ① 準備運動
- ② 場の準備
- ③ 試しの運動
- ④ できるタイム (振り返り)
- ⑤ 確かめの運動
- ⑥ 後片付け
- ⑦ まとめ・振り返り

(6) 運動が苦手な児童への配慮

適切な教具・学習具の作成

(7) 運動の楽しさを味わわせる環境の工夫

運動の「楽しさ」の見直し、音楽と運動の連携

2 日常的な運動に取り組むための環境整備

(1) サーキットトレーニングの設定 (固定施設)

(2) なわとび検定の実施 (運動委員会主催)

(3) 投的板の設置 (職員活動)

3 PTA や外部団体、地域との連携

(1) 学校保健委員会との連携

- ① 早寝・早起き・朝ごはん調査と保護者への啓発
- ② 親子クッキングの実施

(2) 「一家庭一運動」の取組

(3) 地域スポーツ人材と連携した授業・遊び改善

- ① 体育科授業における TT 指導、教具の準備
- ② 昼休みの遊び指導

●工夫したこと

- ① 授業改善の視点として「学び合い」を取り入れ、「できるポイント」を使って相互にアドバイスしたり、動きを確認させたりした。また、児童が主体的に運動に取り組む学習過程に改善した。
- ② 運動が苦手な児童への配慮として、「怖くない」「痛くない」教具・学習具を作成した。
(ダンボールハードル、新聞紙サッカーボール等)
- ③ 体育の授業の中の「楽しさ」を見直し、主体的に学習に参加している実感をもたせた。

取組の成果

- ① 運動能力調査において伸びが見られた。
- ② 体育の授業や運動・スポーツに対する意識、自己肯定感の高まりが感じられるようになった。

今後の課題

- ① 新学習指導要領につながる「指導と評価の一体化」を図る研究をさらに進める。
- ② 自己肯定感の高まりと学習規律を学力向上へつなげる。
- ③ “わかる” “できる” を “またやりたい” という児童の意欲がさらに高まるように授業改善・環境整備を図る。